高齢者の暮らしと介護についてのアンケート調査結果報告書（概要版）

令和８年４月　高松市

１　調査対象及び有効回収数

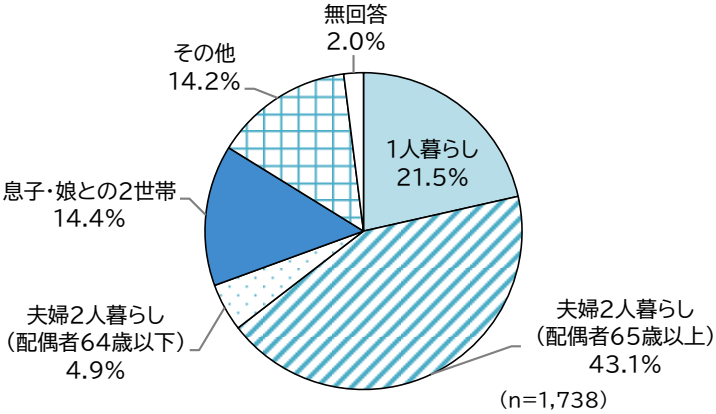
（調査期間：令和７年12月１日～12月26日 ※ＷＥＢ調査は令和８年１月７日まで）

調査種別	調査対象者	標本数	有効回収数	有効回収率	(前回回収率)
①高齢者	65歳以上の高齢者の方 （要介護１～５の認定者を除く）	3,000人	1,738人	57.9%	(67.2%)
②一般市民	40歳以上65歳未満の方	1,000人	380人	38.0%	(39.5%)

２　結果報告

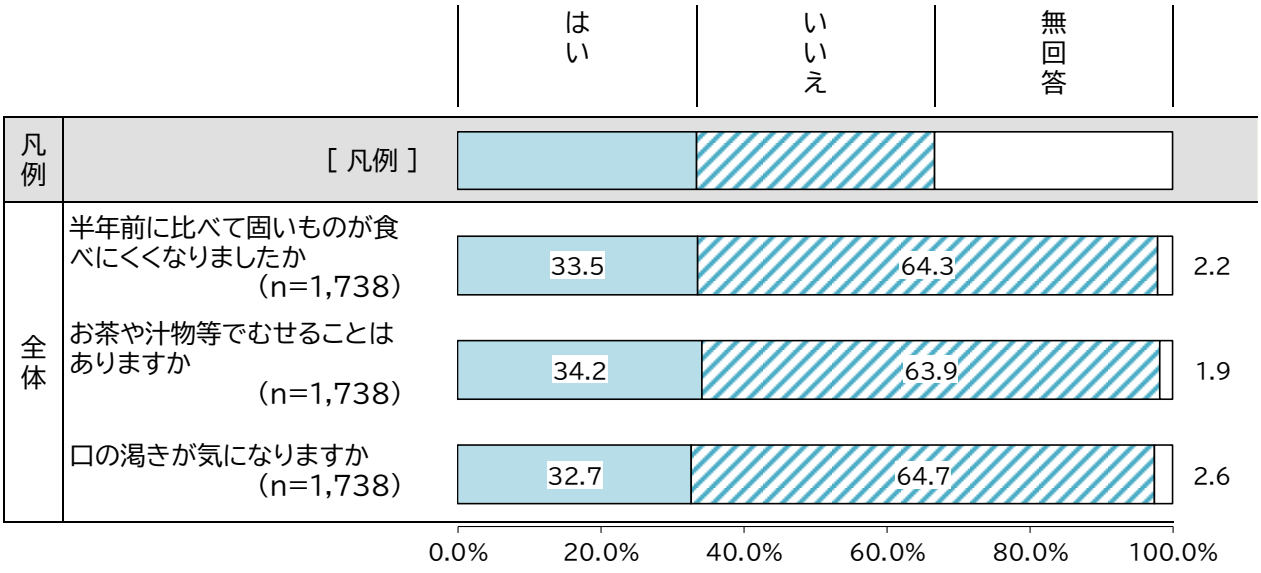
●　家族構成について　①高齢者（報告書Ｐ８）

「夫婦２人暮らし（配偶者65歳以上）」または「夫婦２人暮らし（配偶者64歳以下）」と回答した人が合わせて約５割、「１人暮らし」が約２割



●　口腔機能について　①高齢者（報告書Ｐ18～19）

咀嚼機能の低下、嚥下機能の低下、口の渇きを感じている人はそれぞれ３割以上

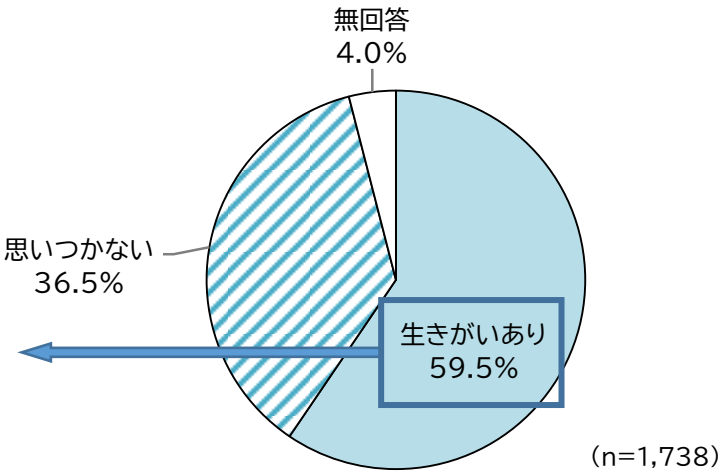


● 生きがいの有無と内容について　①高齢者（報告書Ｐ２９）

「生きがいあり」の人が約６割

>>生きがいの内容（上位３つ）

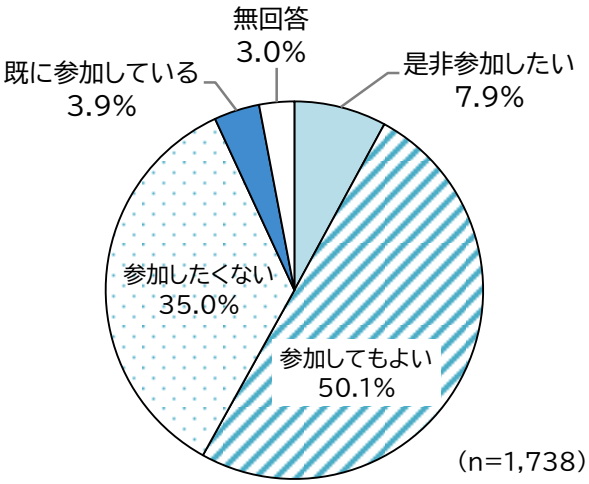
- 家族・子孫との交流（231件）
- 趣味・教養（68件）
- 仕事・社会貢献（55件）



【成果指標】　生きがいがある高齢者の割合　　Ｒ７目標値：６２.０%

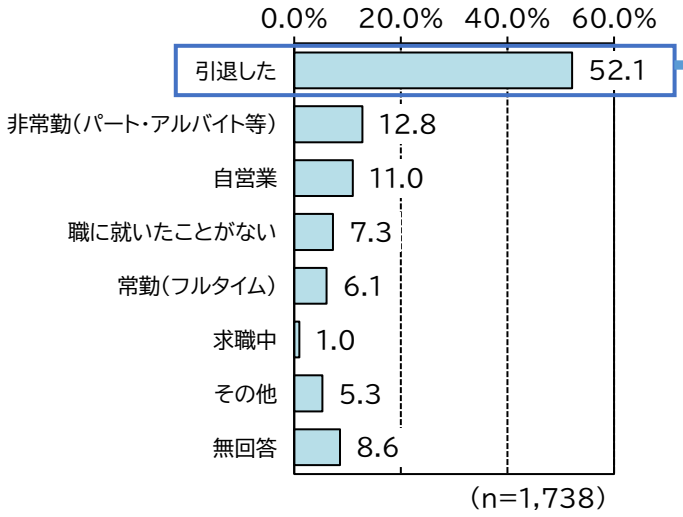
● 地域づくりへの参加意向について　①高齢者（報告書Ｐ32）

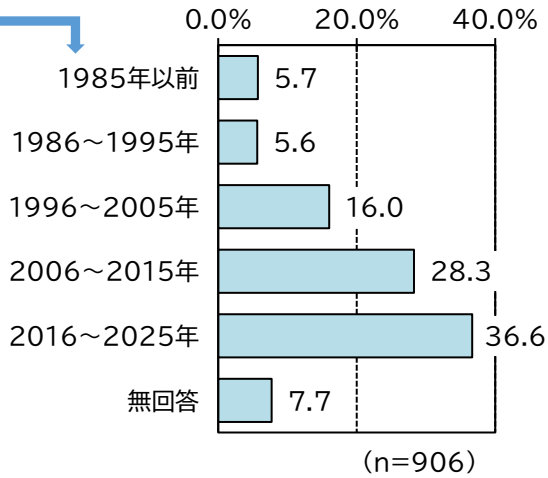
「是非参加したい」または「参加してもよい」と回答した人が合わせて５割以上



● 現在の就労状態　※新規設問
● （引退した方のみ）引退時期　※新規設問

①高齢者（報告書Ｐ36）



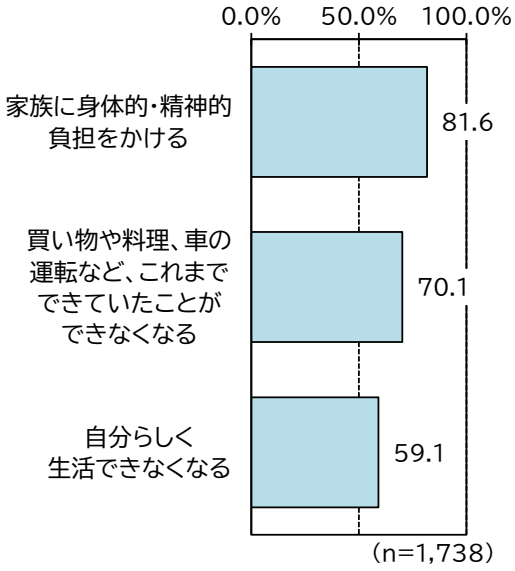


● 認知症に対する不安について	①高齢者 （報告書Ｐ46～47） ②一般市民（報告書Ｐ83～84）

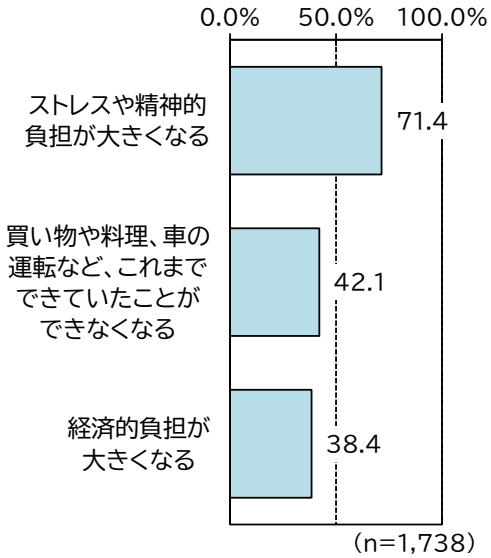
①高齢者

もし、自分が認知症になったら、「家族に身体的・精神的負担をかける」に不安を感じる人が約８割。もし、家族が認知症になったら（現在認知症の家族がいる場合も含む）、「ストレスや精神的負担が大きくなる」に不安を感じる人が約７割

＜自分＞



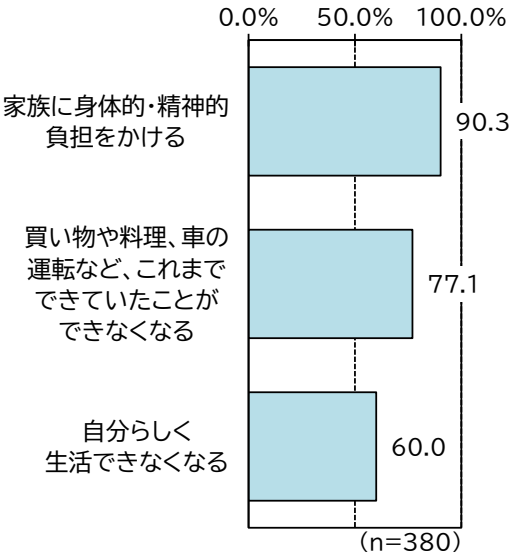
＜家族＞



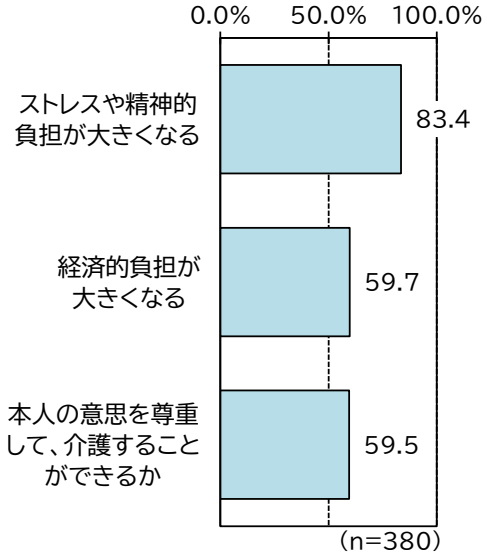
②一般市民

もし、自分が認知症になったら、「家族に身体的・精神的負担をかける」に不安を感じる人が約９割。もし、家族が認知症になったら（現在認知症の家族がいる場合も含む）、「ストレスや精神的負担が大きくなる」に不安を感じる人が約８割

＜自分＞

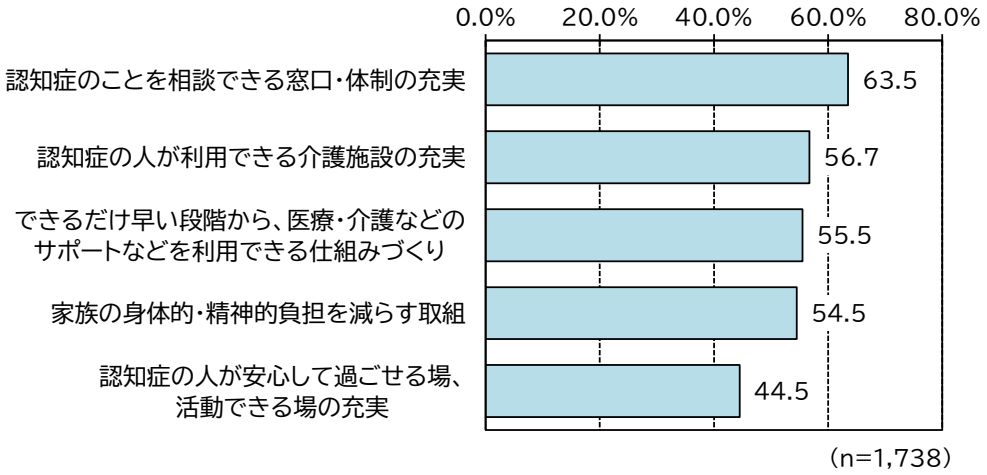


＜家族＞

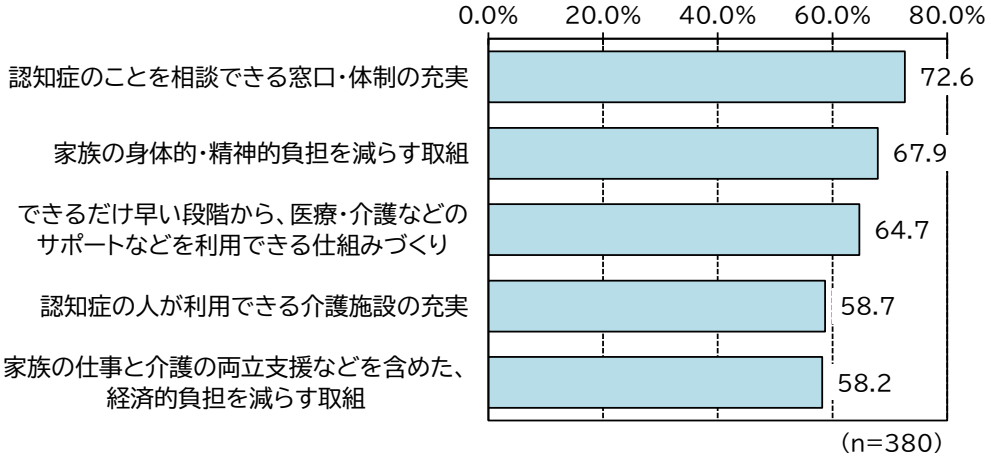


● 認知症になっても安心して暮らせるために重点を置くべきことについて	①高齢者　（報告書Ｐ49） ②一般市民（報告書Ｐ86）

①重点を置くべきこと（上位５つ）

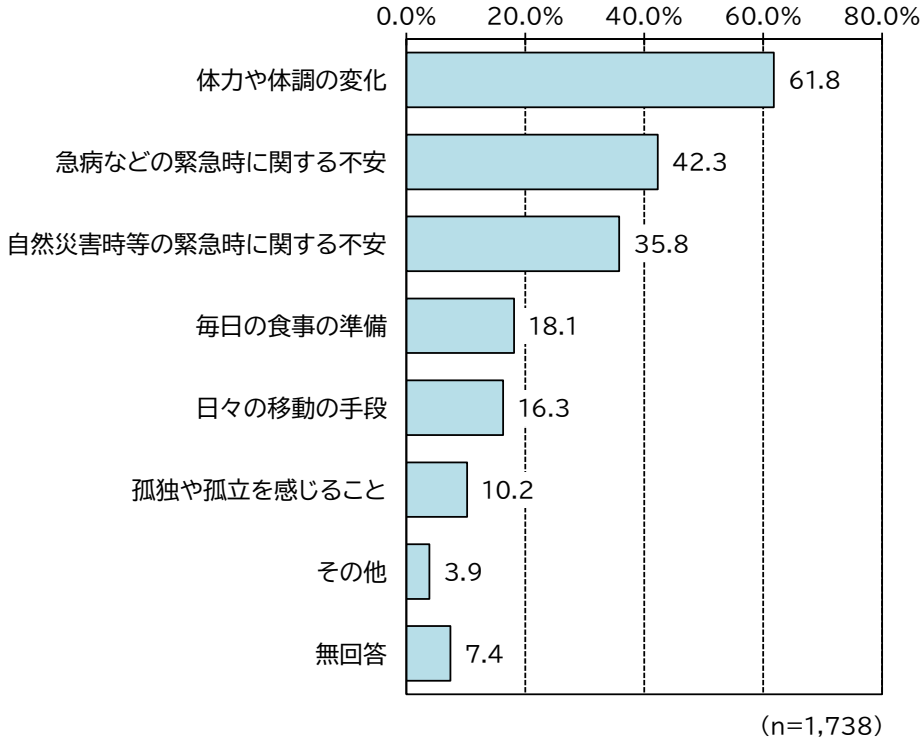


②重点を置くべきこと（上位５つ）



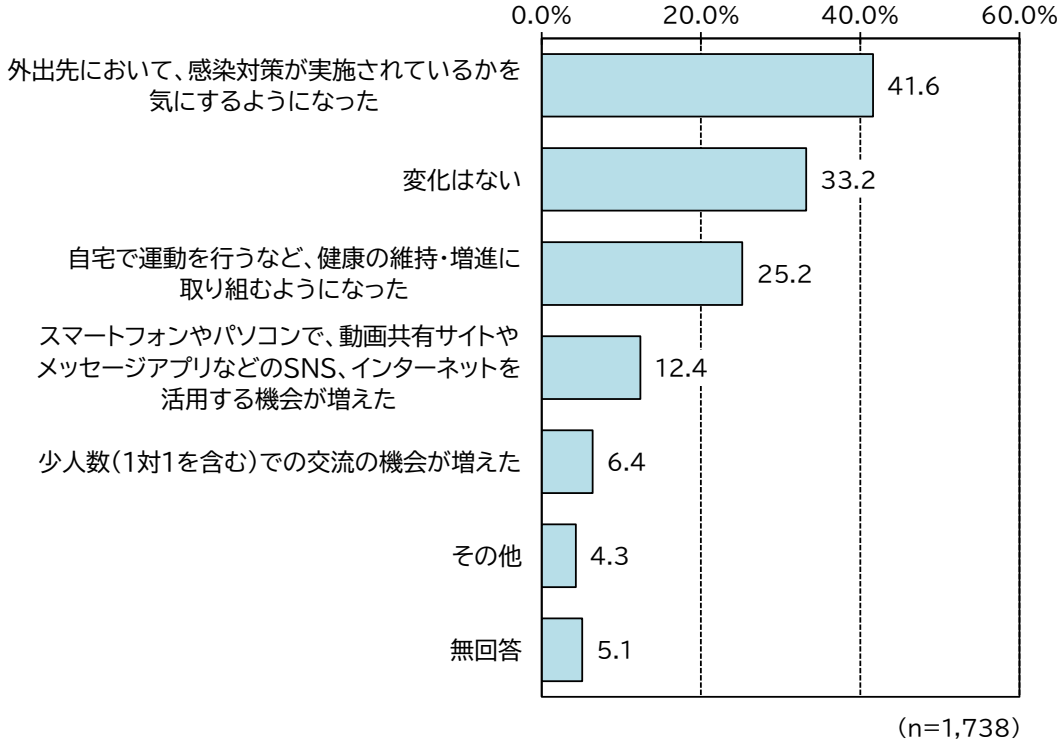
● 生活の中での不安や困りごとについて	①高齢者 （報告書Ｐ５１）

生活の中で「体力や体調の変化」を不安に感じている人は約６割



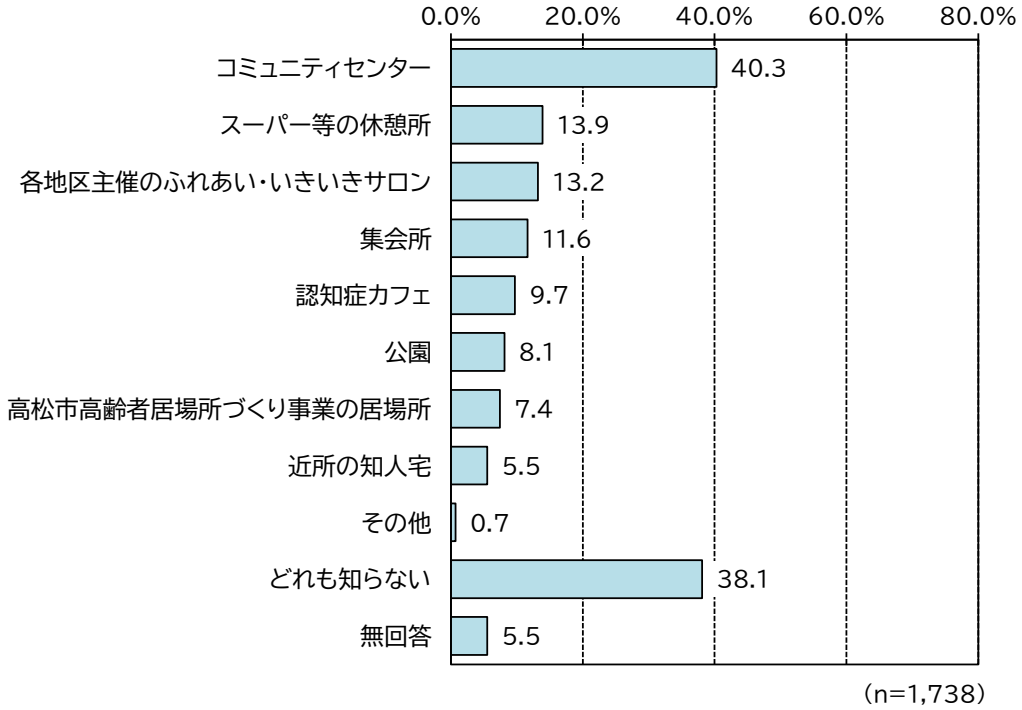
● 新型コロナウイルス感染症流行以降、 現在も継続している生活の変化 ※新規設問	①高齢者（報告書Ｐ５５）

「外出先において、感染症対策が実施されているかを気にするようになった」が最も多く、約４割



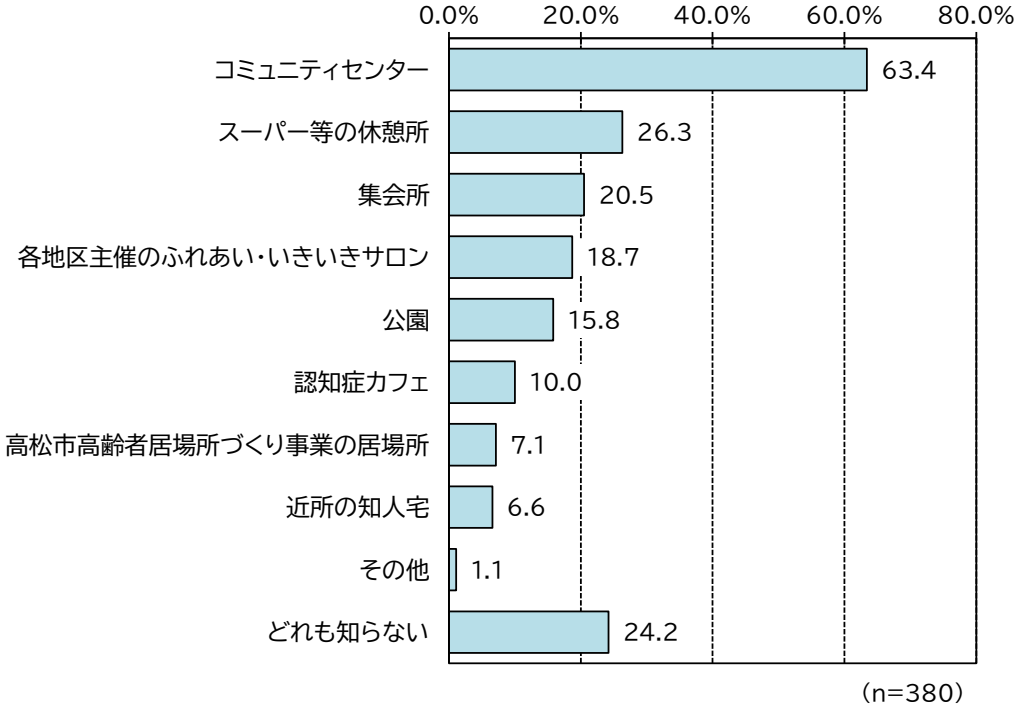
● 高齢者が気軽に集える場所の認知度について	①高齢者　（報告書Ｐ56） ②一般市民（報告書Ｐ81）

①「コミュニティセンター」が最も多く、約４割（どれも知らない人は約４割）



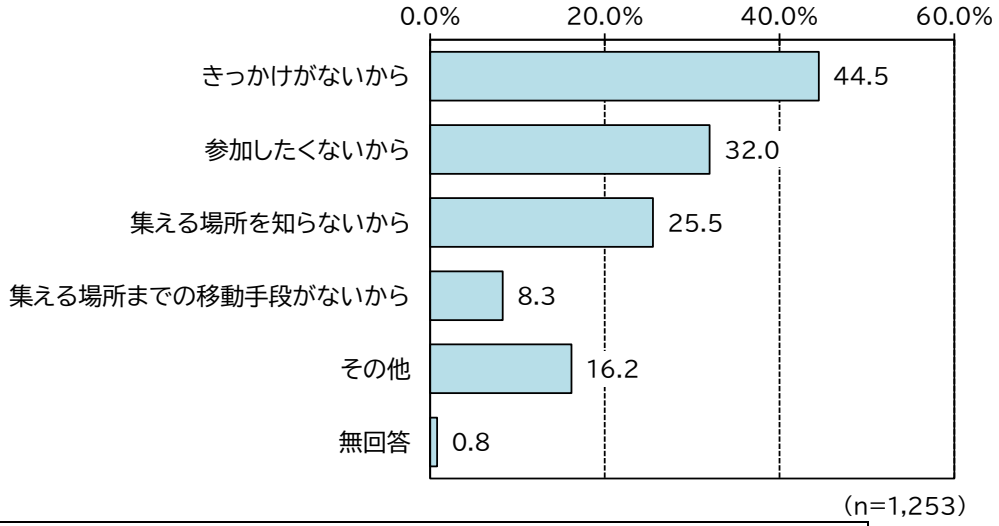
【参考】高齢者が気軽に集える場所に参加している方は21.1％
（「どれも参加していない」と回答した方と無回答を除いた割合）

②「コミュニティセンター」が最も多く、６割以上（どれも知らない人は約２割）



● 高齢者が集える場所に参加しない理由について　①高齢者（報告書Ｐ57）

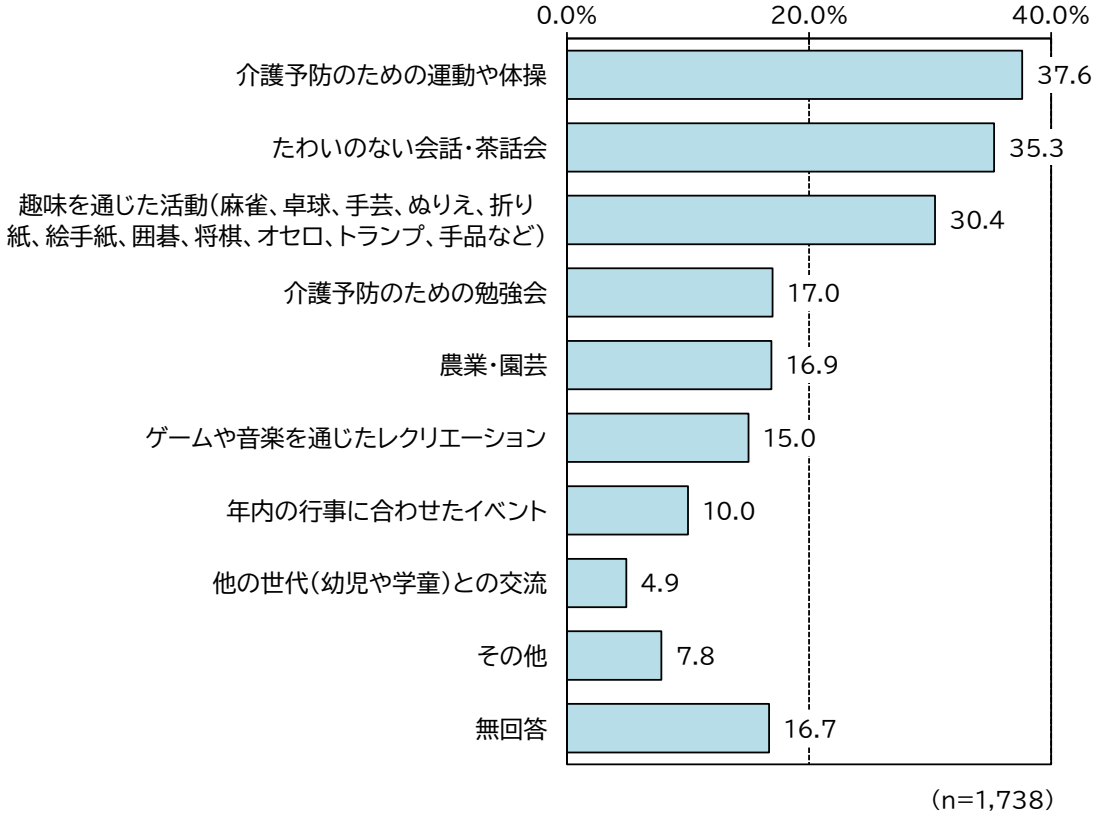
「きっかけがないから」が最も多く、約４割



【参考】高齢者が気軽に集える場所にどれも参加していない方は72.1％

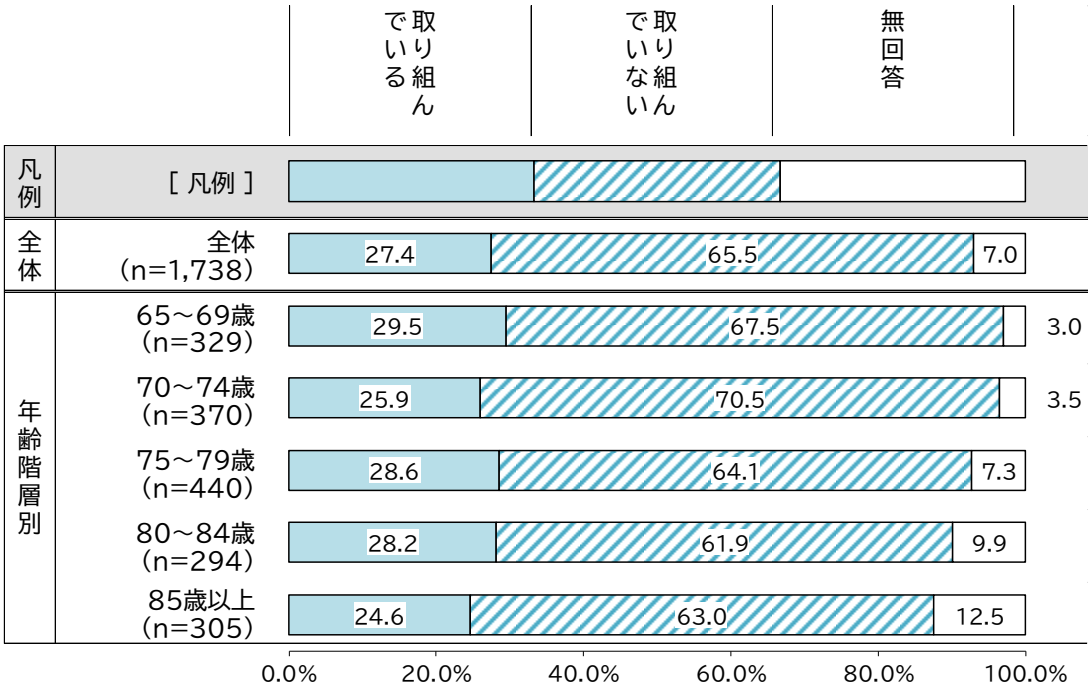
● 高齢者が集える場所で行いたい活動について　①高齢者（報告書Ｐ59）

「介護予防のための運動や体操」と「たわいのない会話・茶話会」が約４割

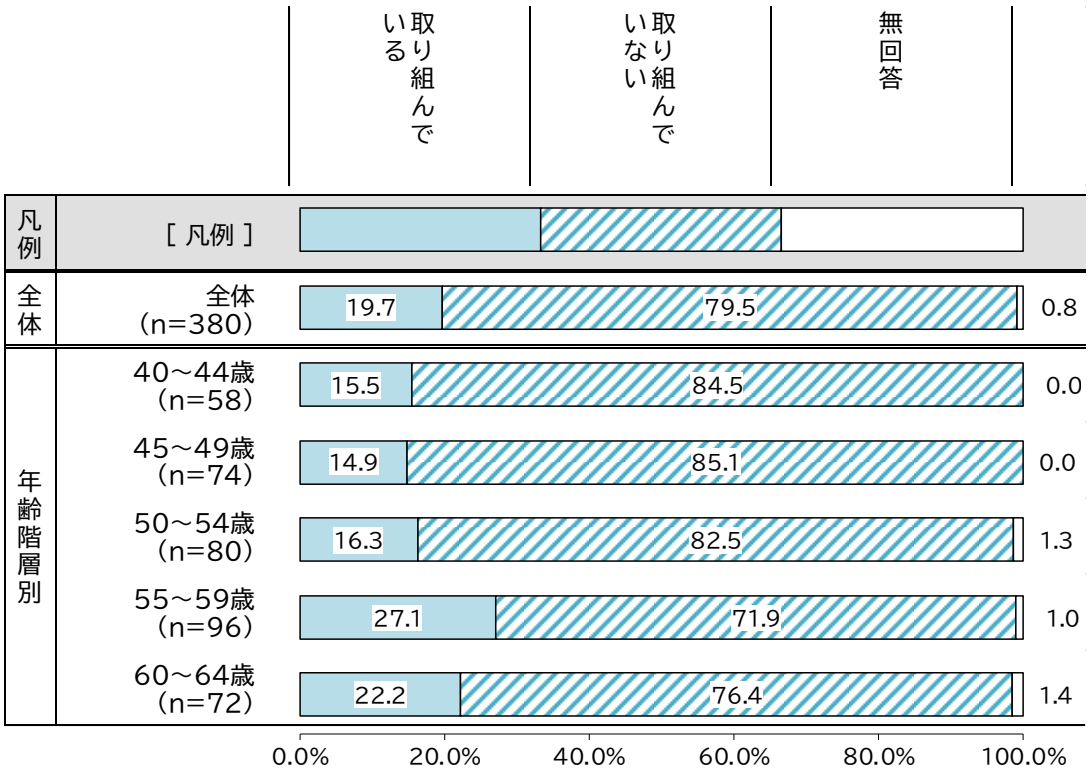


● フレイル対策が重視されている中、現在の介護予防への取り組み状況について	①高齢者　（報告書Ｐ62） ②一般市民（報告書Ｐ88）

①高齢者　　現在、介護予防に取り組んでいる方は約３割

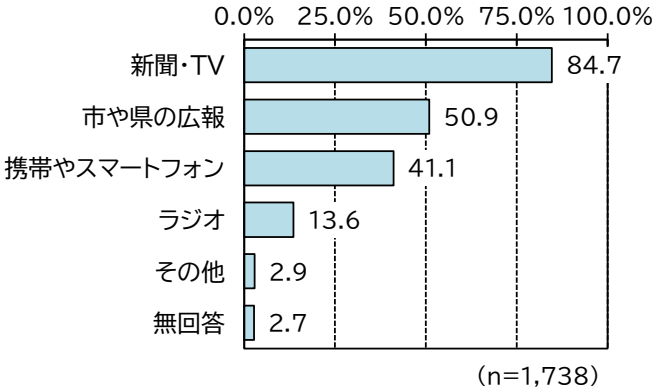


②一般市民　　現在、介護予防に取り組んでいる方は約２割（55～59歳は約３割）

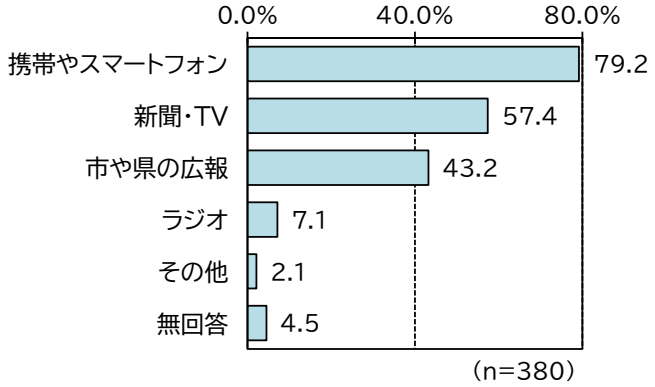


● 日常の情報収集手段について	①高齢者　（報告書Ｐ65） ②一般市民（報告書Ｐ92）

①高齢者
新聞・TVが約８割



②一般市民
携帯やスマートフォンが約８割



● 自分の最期を迎えたい場所について（上位３つ）	①高齢者　（報告書Ｐ68） ②一般市民（報告書Ｐ95）

	１位	２位	３位
①高齢者 （n=1,738）	自宅 （55.5%）	緩和ケア施設のある医療機関 （14.7%）	今まで通ったことのある医療機関 （11.4%）
②一般市民 （n=380）	自宅 （46.6%）	緩和ケア施設のある医療機関 （26.1%）	介護保険施設 （8.7%）

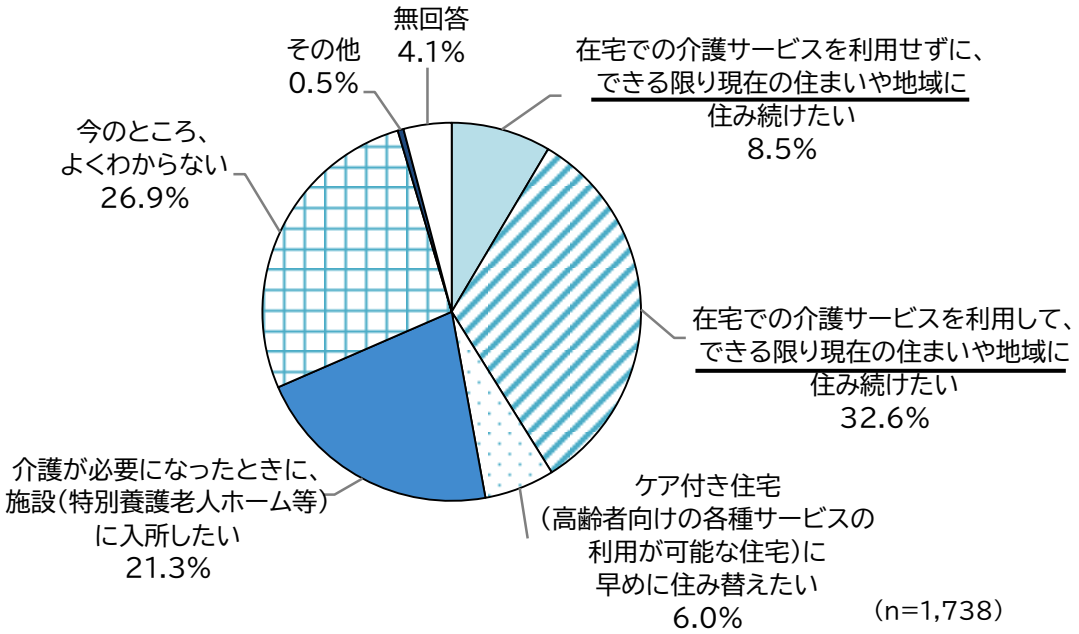
● 自分の最期の時について話し合った経験について（上位３つ）	①高齢者　（報告書Ｐ68） ②一般市民（報告書Ｐ96）

	１位	２位	３位
①高齢者 （n=1,738）	話し合ったことはない （50.2%）	話し合ったことはないが、話し合ってみたいと思う （27.6%）	話し合ったことがある （19.2%）
②一般市民 （n=380）	話し合ったことはない （59.2%）	話し合ったことはないが、話し合ってみたいと思う （24.5%）	話し合ったことがある （11.8%）

● 将来の住まいと介護サービスの利用について	①高齢者　（報告書Ｐ69） ②一般市民（報告書Ｐ97）

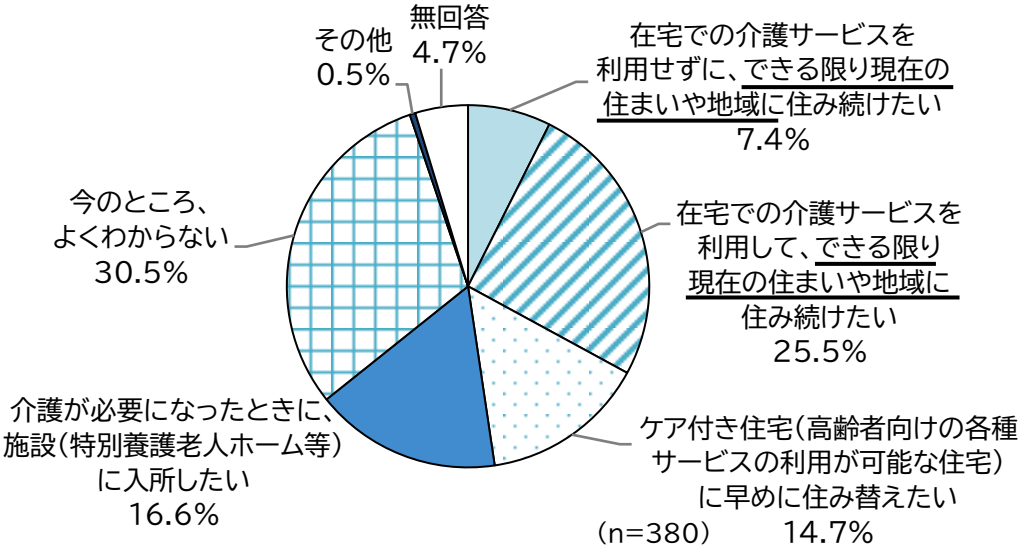
①高齢者

将来は、介護施設よりも、現在の住まいや地域に住み続けたい人が多い



②一般市民

現在の住まいや地域に住み続けたい人、必要に応じて介護施設に入所したい人、今のところよくわからない人が、それぞれ約３割



● 地域包括ケアシステムの構築の推進に当たり、特に重要だと思うことについて（上位３つ）	①高齢者　（報告書Ｐ71） ②一般市民（報告書Ｐ99）

	１位	２位	３位
①高齢者（n=1,738）	家族や親族の理解と協力（72.9%）	自宅近くの診療所・医院やクリニックの充実（61.0%）	介護保険施設（特養など）の充実（48.7%）
②一般市民（n=380）	家族や親族の理解と協力（79.2%）	自宅近くの診療所・医院やクリニックの充実（63.7%）	行政（地域包括支援センターなど）の支援（56.6%）

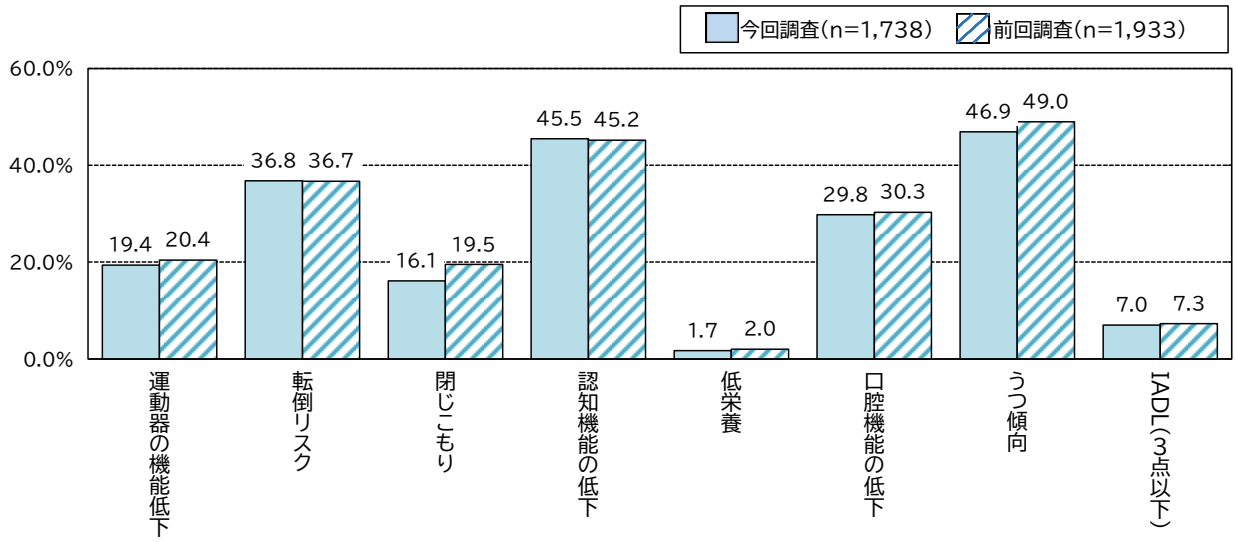
● 各種リスク判定結果について	①高齢者（報告書Ｐ107～）

リスク判定とは、国の示すリスク判定項目（閉じこもり傾向、低栄養の傾向等）に関連する設問において、特定の選択肢を一定数選んだ者をリスク該当者として判定するもの。

例）「物忘れが多いと感じますか」の設問に対し、「はい」と回答している場合、
認知機能の低下のリスクがあると判定する。

下図は、調査対象者のうち、各判定項目におけるリスク該当者の割合を示している。

>>前回（第９期調査）との比較



● 自由意見（抜粋）	①高齢者　（報告書Ｐ100～） ②一般市民（報告書Ｐ104～）

①高齢者	**介護保険制度について** 介護保険制度は決まりも必要だが、多様な考え方や生活に対応できるゆとりも必要だと感じる。書類が多くネット社会に対応しきれていないため、簡素化を進めるべき。	女性 70～74歳
	介護保険料、医療費など経済的負担について デイサービスの利用日数を増やしたいが、介護保険料が高くなり生活が不安。年金生活で利用可能な範囲になることを希望する。	女性 75～79歳
	介護保険サービス・在宅福祉サービスについて 認知症を認めない人に対し、介護保険を活用して自宅生活を支援したい。現行制度では、本人が拒否すると介護サービスの利用が困難。	男性 65～69歳
	介護予防について 現在は健康で動けており、介護を意識していない。 介護に備え、食事や運動を心がけているが、理解しやすい情報冊子があれば良いと考えている。	男性 65～69歳
	不安なことや困りごとについて 一人暮らしで夜間の生活に不安を感じる。携帯電話を所持しているが、緊急時に発信できないことがある。枕元のブザーで救急車に繋がるシステムがあれば安心。	女性 85歳以上
	バスなどの移動手段について 免許返納を促すなら公共交通機関の充実を望む。バス便が少なく不便である。街中だけでなく郊外の公共交通も充実させてほしい。	女性 65～69歳
	特養や有料老人ホーム等への入居について 住み慣れた地域で自分らしく最期まで過ごせるよう、若い世代と交流できるシェアハウスやグループホームなどの体制整備を要望する。	女性 75～79歳
	行政への要望・意見について 近くのコミュニティセンターで、参加しやすい機会やプログラムを増やしてほしい。地域に愛着を持つ機会を増やすため、地域の歴史・風土・文化に触れる場を拡大してほしい。	男性 70～74歳
②一般市民	**介護保険制度について** 介護保険制度だけでは本人に寄り添った支援が難しいと感じる。高齢者の困りごとは複雑で多岐にわたる。事務的ではなく、人間味のある寄り添った支援に繋がる施策を期待する。	女性 55～59歳
	介護保険サービス・在宅福祉サービスについて 介護サービスは知っているが、人付き合いが苦手な人にとっては利用へのハードルが高い。	女性 45～49歳
	不安なことや困りごとについて 支援が必要な時にどこに相談すれば良いか分からない。 最初の相談窓口を教えてほしい。	女性 60～64歳
	行政への要望・意見について 親の介護で認定を受ける際、担当者の対応に差があり、誘導的な言葉で等級を下げようとしていると感じ不信感を抱く。 担当者には人の生涯に関わる意識を持ち、レベルを一定にするための研修を希望する。	男性 60～64歳